

# 第九章 行 事

## 第一節 お日待ち

中富には、古くから伝わるお日待ちという伝統行事がある。今からおよそ三百年前の宝永元年（一七〇四）小糸川を現在の通りに、釜神から直線にする工事が完了したのである。中富をとりまくように東前から下湯江の方に向かって流れていた小糸川は、大雨が降れば農作物は水没し、収穫は出来ず、川欠けで益々土地はせまくなっていった。この窮状を救ったのが、時の地頭、大草平内という人であった。村人の苦難を哀れみ、それを解決する方法は小糸川を直線にすることであると考へ、上司にお願いしたのである。然しその願いは成就することなく元禄十二年、六十才でこの世をさつたのである。元禄十五年四月、中富村、下湯江村連名で略図を添えて御代官にお願いしたのである。長さ二百六拾間（四六八米）の新川を堀り直線にすること。古川通りを新田に開発すること。新川の作業は、両村の百姓が自分達の力でやること。お弁当米お恵みいただきたいこと。という内容文書である。かつて平内の根回しが出来ていたのか、早速受け入れられ工事が始まったのである。流し普請と称して雨が降ると鍬くわや鋤すまで土を流して川幅を広げ、二年間で工事は完了したが跡地の新田開発や

境界の整理が三年位かかったようである。宝永四年（一七〇七）一様の完成をみたのである。

洪水も少なくなり、農作物はよくでき、収穫も多く生活はゆたかになったのである。村人は平内の徳を慕い富西寺の境内に小祠を建て、平内の木像を安置し「日の宮様」としてあげ、お日待ちと称して供養を続けている。

かつては年四回、一月十五日、四月、九月、十一月三十日に実施されていたが、日露戦争（一九〇五）以降は一月と十一月の年二回となつている。勤め人が多くなり平日は集まりがよくないので十数年前から、一月十五日前後の土、日。十一月三十日前後の土、日。日に実施されている。

当番についてはさだかではないが、現在は五班の編成で輪番となつている。従つて三年目に当番が回つてくることになる。

当日、当番は早朝から南北に別れて、リヤカーを引いて、各戸を回つて材料を集める。白米五合、味噌、野菜、焚き木。但し野菜はゴボウ、人参、大根、里芋、に限られている。白米の外はお金で支払つてもよいことになつている。

集め終ると公会堂で手分けして準備に取りかかる。昔は男性に限られていたようであるが、現在は男女関係なく仕事を



分担する。男性は七色唐辛子。女性はケンチンの材料作りから始める。本ミカンの干した皮、干した唐辛子を串にさして焼き、煎ったゴマと一緒にヤゲンですり合わせる唐辛子の粉が飛び、涙とクシヤミの中で出来上がるのである。

オカズは煮ナマスである。大根、人参を切り干しかきでかき、から炒りして、酢、塩、砂糖で味付けして煮る。

ご飯は大きな平釜で炊いていたが、最近は大形の炊飯器で炊くようになった。量が多いので結構おいしいご飯が出来上がる。夕暮になると一番太鼓、そして二番太鼓、と準備を知らせ、三番太鼓を聞き家を出る。現在は時間が知らされているので、三番太鼓だけである。碗二ヶ、小皿、箸を袋に入れてお寺の「日の宮様」の前に集合する。和尚さんの読経が終って全員が参拝し公会堂に向う。上座に和尚さん、自治会役員が正座する。全員が席につくと、小番頭から挨拶があり、各人の持つてきた碗、小皿を膳に置く。

いよいよ始まりである。小皿に煮ナマス。お碗から溢れそうなケンチン汁。飯は茶碗が倒れないように上手に山盛りにする。七色も添えられてある。自治会長の言葉で一斉に食べ始める。当番は如何に食べさせるか、チャンスを伺っている。ケンチンを食べているとご飯が山盛りにされる。いよいよ、

たくさんだよ、頑張れよ、大騒ぎである。煮ナマスをおかずには飯を食ってしまったて、碗をポケットにしまい、次にケンチンを食べるという、変則的な方法で食べ終ることもある。全員が食べ終ると、小番頭から明朝の連絡があり散会となる。

朝食は七時に決まっているので、当番は五時頃に集まって準備を始める。前夜用意しておいたスマシを使ってゴボウとコンブの入った汁を作る。あとは煮ナマスと七色である。

昔は太鼓の音で目をさましたが、勤め人の多い現在、日曜日の早起きは苦手のようなのである。直接公会堂に集まるのであるが、前夜より人数は少ない。当番も心得たもので無理に強い事はない。隣の人とゆっくり話しながら、ご馳走になることができる。食べ終って散会となるが、当番は朝食後、後始末をして「お日待ち」のすべてが終了する。

ずっと昔は戸毎不参なく世帯主が寺に集まり、今と同じように山盛りのご飯やケンチン汁を戴き、その晩、お籠りをして朔日（陰暦の月の第一日）の朝日の昇る頃「日の宮様」の前で住職の読経、参拝してから朝食をすませて解散したという。帰りには持参した碗に飯や菜を山盛り戴き、「日の宮様」の恩恵を改めて家族に伝えたのである。時移り飽食の時代、

米は余り減反を余儀なくされているとき、腹一杯食べられることに、村中の人達で喜び合った時代、正に隔世の感があるがこれも私達の先代の通った道である。三百年前の昔に心を馳せ、感謝の気持ちと、コミュニケーションを図る場として大切にすべき行事である。

大草平内の小祠は、長年の風雪で倒壊の危険があったので昭和四十八年同じ場所に、同じ形で建立したものである。



## 第二節 祭り囃子と神輿

発祥や由来についてはさだかではないが、曲調からしておそらく江戸から木更津に渡り、各地に広められ受け継がれてきたものと推測される。確たる記録もなくすでに知る由もないが、土地の古老の話によると、明治三十年代、母親の作ってくれた晒の半纏はんまわんを着て、大勢集まっている石上神社の境内には出店等も多く、笛、太鼓、そして神輿の渡御と楽しい祭りであったという。

祭り囃子と神輿が付随したものと考えるとき、現在の小太鼓の胴の内側には、明治三十一年（一八九八）十月吉日、東京浅草区一丁目、太鼓製造所、高橋又右エ門重政と達筆で記されている。又白木作りの神輿は明治十九年、中富棟梁、齊藤清五郎（清蔵）の作と伝えられている。その前の神輿は君津市三直の天王様で使っていたものを受け継いだものの、少人数の村人ではその重さに耐えられず、現在は行屋（出羽三山）の社殿として残されている。これらのことから中富の祭り囃子はかなり古くから定着していたものと推定される。

戦前、祭礼には勿論のこと、田植が終わると天王様（境内南側）の祭り（七月一日）とさなぶりは一緒であったので、若



い衆が境内に集まり、祭り囃子をもって労をねぎらったという。また、七月十五日の虫送りには大八車に太鼓を乗せ、五穀豊饒を祈りながら田圃道を一周したという（昭和の初めまで）。

戦中、出征兵士を送る部落壮行会には、武運長久を祈念し、太鼓で送り出したことは私達の記憶に、まだ新しいところである。ふる里の祭り囃子を心に残しながら、再びこの地を踏むこともなく、南溟の果に莞爾として散っていった若者達、祭り囃子のたどった歴史のひとこまである。

戦後、混乱の中から漸く平和への第一歩を踏み出した、昭和二十二年、若い衆の神輿に合わせて、年輩の人達による笛太鼓が村中に響き渡ったのである。曲は神田丸、昇殿、ボッコミ、と父親達が楽しんでいたことが昨日の出来事のようにある。その年、後継者をつくるため、若い衆が公会堂に集められ、指導を受けたものの敗戦の傷は癒えず、落着いて受講する者もなく、ついで一人の後継者もなく、昭和三十五年頃消滅に至ったのである。

昭和四十九年、各地で祭り囃子が話題になり始めたとき、三十年ぶりに神輿の埃を落とし、境内に飾ったのである。五十一年、坂田青年部の応援を得て、神輿が村中を渡御したの

であるが、祭り囃子の消滅に痛感した区民一同、是非習得したいとの意向から、かつて祭礼には昔から交流のあった坂田自治会の応援を得て、五十二年五月初旬から、十月まで休むことなく、練習を重ね笛九名、大太鼓七名、小太鼓六名の誕生をみたのである。この無形文化を大切に永劫に伝えるため、毎年保存会による子供達の指導が行われている。



神輿を先導する祭り囃子

### 第三節 土手の草刈

毎年七月初旬頃になると、江川の堤防の草刈りが行われる。部落の老人の話では、関東大震災の時に堤防が崩れ、新しく築造してから、堤防を守るため始めたそうであるから七十年余り続いていることになる。

作業日程は、自治会で決定し部落内に通知される。

当日の朝になると、それぞれに鎌や草刈機を持って神社に集合し、点呼を受け、自治会長の挨拶や注意事項などを聞く。また、お茶当番もその時に決められるのである。

作業を始める所は、江川の釜神の境界からであり、全員そこまでぞろぞろと歩いて行き、到着次第刈り始める。終る場所は、西ノ下の下湯江の水止め場までだがかなりの距離である。暑いときなどは、早くお茶当番が来てくれないかと首を長くしたり、時には、蜂の襲撃にあつたり、蝮が出現したりしてなかなか大変な作業である。最近は、草刈機が一般的になり早く終るようになったが鎌の時代であっても午前中で終了していた。





#### 第四節 さなぶり、川びたり、宮薙ぎ、茅取り

さなぶり

田植え終了後、最後の苗束を荒神に供え、田の神を送る祭礼であった。

かつては、七月一日に行われ、太鼓を叩いて、部落をあげて、お祝いをした。

田植えは、稲作の最大の労働であり、近くの親戚、又は、となりどうし等、助け合う（手間借）ことが多かった。

各家では、赤飯、巻きずし、かしわ餅などを作り、さなぶりのご馳走として振舞ったものである。

現在では、田植えも機械化され四月から五月初旬と早くなり、さなぶりもそれに合わせ、五月中旬の一日とされるようになった。

格別、行事らしいことはせず、単純に休日とすることが多いが、今なお、赤飯等を作り御祝いをする風習は残され、さなぶりは、依然として村の大切な行事のひとつである。

川びたり

米作農家にとって水ほど貴重なものはない。橋のたもとの

水神様に感謝し、水難除けを祈願し餅を供える行事は、古くからこの中富でも行われていたようである。昔は、十二月一日、茶わんを持って川に行き砂を入れ、川岸の松の木から三本枝を折り、荒神様に供えたとか、十一月三十日に餅をつき、十二月朔日の朝、後生橋の近くの川岸に餅を供え、川に入り尻を浸したとか、年寄の言い伝えがある。現在では、数軒の家での餅つき程度に名残りを留めている。

宮薙ぎ

この行事は、何時頃から行われていたのか定かではないが、毎年二回、七月一日（天王様のお祭り）と十月八日（石上神社の祭礼の前日）に決まって行われる自治会総出の奉仕作業である。

神社総代が世話人を通じ、この行事を行う旨おふれを出す。当日自治会全員がまだ薄暗い早朝五時に、各自が熊手・鍬・鎌を持ちより神社に集まって、境内の雑草を取り、落葉を掃き出し掃除を行い清めた。昔は、子供達が境内を掃除したり、遊んだりしていたので、この作業は三十分程度で終わった。

## 茅取り

人間が住居を構えた時から、屋根は茅葺きと決まっていたようであるが、戦後を境に建築様式も変わり、急速に茅屋根は姿を消した。茅の寿命が二十年位といわれるので、現在は全く見ることが出来ない。

昭和十年代の初めには、屋根の葺かえ作業を随所に見ることができた。屋根屋さんは、縄を切る道具に刀を使っていたので、子供達は驚き遠まきに見守ったものである。大きな母屋の屋根の厚さは一米近くもあり、その量は莫大なもので何年か茅を備蓄してから屋根替えをやったようである。

晩秋の頃、親達が茅刈りと言って出かけていったが、恐らく村中の人達が、一軒の屋根替えのために参加していたのではないだろうか。こんなところにも村人の睦み助け合いの暖かい風習が、昔から続いていたのである。

